

平成 22 年 5 月 17 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006年度～2009年度

課題番号：18330098

研究課題名（和文） 現代農村の生活維持における村落組織の再編に関する実証的研究

研究課題名（英文） research on reorganization of village in rural community

研究代表者

松岡 昌則（MATSUOKA MASANORI）

北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：70111242

研究成果の概要（和文）：

今日の村落は、生産・生活の個別化を進行させ、かつてのぐるみ対応は今日の村落は、生産・生活の個別化を進行させ、かつてのぐるみ対応は困難となってきてはいるが、村落内部の活動をはじめ、村落の外に広がる諸活動においても、村落の諸関係を基体として、生活を維持する努力が多く行われている。それは現代においても、生活維持のための対応に村落機能が重要な意味をもっていることを示すものである。

研究成果の概要（英文）：

Today it becomes difficult that village organizations totally satisfy the villagers' needs, because villagers life has further diversified under the individualism trends. Under these circumstances, however, villagers try to put their effort on carrying out their life mobilizing their social networks and groups basing on village. These cases show the importance of village function in current local life.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	5,600,000	1,680,000	7,280,000
2007年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2008年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2009年度	2,300,000	690,000	2,990,000
年度			
総計	13,900,000	4,170,000	18,070,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：地域・村落、生活維持、村落組織、村落機能、地域振興、農村高齢者

1. 研究開始当初の背景

現代の農村は、農業においても地域生活においても村落のもつ比重を小さくしているように見える。兼業の深化による農業労働力の脆弱化や農業離脱、農業集落における非農家の増大等、非農業的要素は拡大している。

さらに大型機械一貫体系の確立は農家の自立性を高め、農休日や共同作業の廃止等、村落規制も弱くなっている。そうした村落の変化は、戦後農地改革と1950年代後半からの高度経済成長にともなう大きな流れのなかで、ムラの「解体」的変動として理解される

ことが多かったといえる。

このムラの解体が議論されてからかなり時間が経過したが、近年、村落の再編・再生・存続を指摘する論調が強くなってきたように思われる。もちろん現代の村落は共同体的な性格を強くもつ自足的・自律的な地域社会ではない。また、現代の農村をとりまく状況は、人口の流出、少子高齢化の進行、戸数の減少等、厳しさを一段と増していることも事実である。生活も個別化と広域化のなかで村落内充足は減少している。さらに、近年の国際動向に翻弄される日本農業や通勤兼業における都市農村関係において、農業集落としての村落の社会的統一の意味は薄れてきたかのようにみえる。

今日の地域研究にとって、将来どのような地域を創出するべきか、またすることができるかを、如何に具体的に提起することが求められている。その目標は、そこに住む人々が安心して暮らすことのできる地域をつくることにあることはいうまでもない。いわば、現在の地域社会を住民の協住と定住の空間として再構築する作業である。分断され続ける個人や個々の家族にとって、安心して暮らし続けるために、自分たちで解決しなければならない生活課題がますます増大するなかで、それらへの対応のしくみが模索される必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、現代農村において、そこに居住する人々が生活を維持し住み続けるための条件を、大きな農村社会の構造変動に巻き込まれながらも自らの生活を支えていくための取り組みから明らかにし、基礎的日常生活空間としての村落における諸組織の現代的組み替えを図ることによって、新たな定住条件をいくつかの村落における活動努力から検証しようとするものである。

今日の農村研究は、日本の全体社会の構造変動のなかで、農村、農業集落を捉えなければならないのはいうまでもないとしても、それらが日常の生活にどのようにかわり、どのような対応がありうるのかを検証する必要がある。その意味で、地域農業の維持にとって、また地域に住むひとびとの生活を守り維持するうえで、生活保障の組織として捉えられてきた日本村落の現代においてはたす機能がどこまで有効なのかを問う必要がある。とくに日本の村落が持ち続けてきた個別には完結しない多くの生産・生活場面を、必要に応じて、いろいろなモメントで、みんなであるいは相互しあうシステムを現代にどう活かすことができるかが問われているということが出来る。

そして近年、種々の場面において村落の存続が論議され、また村落への期待も寄せられ

るようになってきた。

村落の存続性の議論は、生活困難性が増大することに対する地域生活の再編・再構築の議論として提起される。それは今日の農業をとりまく厳しい状況を村落全体で乗りきろうとする対応にもあらわれている。そこには地域産業構造の転換のなかで、地域農業の再編への対応の仕方に村落全体としての取り組みがみられる。もちろん有志による村落を超えた新たな生産組織や販売活動に活路を見いだす動きもあるが、地域農業の維持にとってはやはり村落であろう。村落の集団的土地利用や集落営農の考え方で、村落の耕地を保全し、複合化しながら村落の労働力の再編成をはかる試みや村落農家のぐるみ作的作目選択がある。また地域農業の保全のための集団的農地利用の多くは集落内農家の自発的な対応である。このような村落対応は、現在においても地域農業を維持する機能といってもよいであろう。

さらに今日の村落は地域活性化の主体ともなりうる。村落に住むひとびとも自分たちの地域を見直す動きを見せはじめている。村落に住むひとびとも自分たちの地域を見直す動きを見せはじめている。地域の停滞や沈滞の雰囲気から脱却すべく、地域資源を活用した産業育成、あらたな集団の結成や行事の創出による住民結合の強化等、村落の生活拡充機能をいかした取り組みが、村落全体で行われる例も報告されるようになってきた。つまりこれからも安心して住み続けるためには、さまざまな生活課題の解決に向けての協同的対応のしくみをつくる必要がある。そしてそのためには村落が、あるいは内部の社会関係や組織を組み替えて対応する例である。これからの農村社会がいろいろな人がいろいろな形で生き、暮らし続けることができる社会をつくる活動は、身近な村落がもっとも有効であろう。

さらに、近年、環境保全管理主体としての村落機能にも着目されている。

政策遂行による村落機能の活用も多く指摘される場所である。これまで述べてきたような機能をもつ村落は、農業施策の遂行にとっても大きな魅力でもあり、また農民の側からの防衛機制の基盤ともなる。

以上のことから、本研究は、将来にむかって持続的な農村社会の形成を展望するにあたって、村落構造分析を基礎としながら、住民が村落生活を維持し守っていく営為の今日の状況を捉え、新たな地域形成にとって村落組織、村落集団・関係はいかに対応し変容させてきたか、そのさい村落機能がどのような状況でどう発揮できるのか、そのための村落および組織・集団、社会関係はどのように再編されているのかを検証することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 調査対象地を中心とした種々の統計資料の収集と、住民に対する詳細な地域社会の構造分析を主要な方法としている。

(2) 研究代表者および研究分担者が行った調査対象地は、北海道長沼町、秋田県藤里町米田地区、愛媛県西余市宇和町多田集落、北海道旭川市、栃木県芳賀郡益子町山本・大郷戸地区、福島県田島町針生地区、沖縄県石垣市、同竹富島、宮城県七ヶ宿町である。

(3) 研究代表者および研究分担者のそれぞれの研究分野の得意とする課題に対する村落の関わりに焦点をあてて調査を進めた。まず、それぞれの村落組織構成の特徴に応じた村落集団と社会関係を抽出し、そこでの住民の生活維持のための諸活動とライフロング・ラーニングのあり方、地域経済の振興への取り組み、そして高齢者の生活支援の諸相等について分析を行った。

(4) 具体的には、地域労働市場の展開や経営規模、経営作物等による農業生産構造の歴史的展開と農業生産関係、および村落集団の累積的状況とその展開過程の分析地域農業の変容の分析をはじめとして、村内内部構造を捉え、そのうえで生活維持のための主要な条件分析を行った。

(5) 地域農業の維持・向上のために、都市農村関係の構築において、近年大きな流れをつくっている都市農村交流における地域振興と村落の連関構造の把握。とくにグリーンツーリズムの現代的展開と農村の協力組織の存在形態の分析を行った。

(6) 地域産業および地域文化の関連分析、および文化伝承と地域活性化における観光・地場産業と村落組織の関連構造分析を行った。

(7) 高齢者の生活実態分析と農村高齢者の社会的ネットワークにおける生活維持システムの追求。とくに他出子との補完関係分析を行った。

(8) さらにそうした取り組みの過程における現代農民における生活価値の創造過程の内発的な学習過程分析と組織展開の関連分析を行った。

4. 研究成果

(1) 調査対象地におけるそれぞれの村落の組織・集団、及び社会関係における生活維持のための対応は、地域労働市場や農業経営内容、家々の関係、日常的な社会関係等の、地域的な差異をもってはいるが、村落内部の構造を基層にもっていることが確認された。その意味では、生活補完構造と村落組織の対応・村落機能は時代に応じて再生産されている。

(2) まず、農村の生活維持にとって、地域農業の発展は不可欠であるが、随所に新たな

農の取り組みが見られ、村落組織の再編が行われている。

また、今日の農村研究において、新たな生産グループや産直活動、直売所、グリーンツーリズムをはじめとする種々の都市農村交流等の地域の活性化の論議が多くみられるが、多くの場合、村落との関連、あるいはそれまでの地域の社会関係や社会集団の変容という視点は弱く見受けられる。それに対して、本研究は、村落組織の活性化が重要であることを示した。

もちろん、あらたな取り組みに村落がぐるみに対応することは難しい。しかし、活動の方法や内容に村落内社会関係の有り様が大きく影響しており、その意味でも村落社会が今日的に機能しているといえる。

(3) さらに、そうした住民の取り組みを可能にする日常的な学習と実践が、今日的なライフロング・ラーニングの活動として息づいている。

これらはいずれも当該地域における生活の維持向上を目指す住民の主体的な活動であり、現代村落の質的变化の動因である。

(4) このような現代村落の村落生活を詳細に分析することによって、これまでの農村社会学におけるイエ・ムラ理論を相対化し、農村で生活を続けていくための組織としての村落を、時代性と日本農民の生活実践から明らかにした。

地域住民の生活を維持する試みと村落との関わりは、地域の構造や特質と密接に関わりつつ異動をみせているが、今後はそれらの異動を村落組織の再編の可能性を探りながら、現代農村における村落を、今日の時代性と日本農民の生活様式の両面から明らかにした。

(5) 今日的な村落の存続論議が、耕地保全、領域・土地管理調整、環境保全主体等の村落機能の発揮に関するものが多いことに対して、生活保全の村落機能は個人や家々の対応の限界にたつて集団的組織的な対応として重要な機能であり、現代の村落・村落集団・関係は多くの生活維持機能をもっていることが証明された。

(6) また、現代の農村研究において、かつての詳細な構造分析手法による実証研究が少なくなってきた状況において、今日的構造分析を行った点も成果といえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 松村 和則「Search for a path of ski-resort district :Whose Imagination can save the devastated areas?」The

inaugural conference on sport&Society
査読有 巻号なし 2010年 pp.8
-10

- ② 松村 和則「動かないムラに考える」『社会学年報』査読有 36巻
2007年 pp.61-90

〔学会発表〕(計1件)

- ①内田 司 「ツーリズムの展開と地域社会の変容—「観光化する島」・竹富島の「うつぐみ」の精神(こころ)の行方—」北海道社会学会 2009年6月27日 札幌学院大学

〔図書〕(計1件)

- ①小林 甫 北海道公民館協会『公民館の手引き 別冊』北海道公民館協会 2009年
全18頁

〔その他〕

調査報告書

- ①松岡 昌則『地域農業の新たな展開—北海道札幌市周辺農村の取り組みから—』北海道大学大学院文学研究科社会システム科学講座 2010年3月
②今野 裕昭『農村地域の生活変容と地域活性化Ⅱ—栃木県益子町山本の事例—』専修大学文学部社会学専攻 2009年3月
③松岡 昌則『北海道平場農村における地域農業の展開と地域社会関係(2)—北海道夕張郡長沼町の事例—』北海道大学大学院文学研究科社会システム科学講座 2008年3月
④今野 裕昭『農村地域の生活変容と地域活性化Ⅰ—栃木県益子町山本・大郷戸—』専修大学文学部社会学専攻 2008年3月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松岡 昌則 (MATSUOKA MASANORI)
北海道大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：70111242

(2) 研究分担者

小林 甫 (KOBAYASI HAJIME)
松山大学・人文学部・教授
研究者番号：90002146
今野 裕昭 (KONNO HIROAKI)
専修大学・文学部・教授
研究者番号：80133916
松村 和則 (MATSUMURA KAZUNORI)
筑波大学・人間総合科学研究科・教授
研究者番号：70149904
内田 司 (UTIDA TUKASA)
札幌学院大学・人文学部・教授

研究者番号：40142905
佐久間 政広 (SAKUMA MASAHIRO)
東北学院大学・教養学部・教授
研究者番号：30187075